感動を創造する空間！音楽ホールのすべて

CDから音楽配信へ、録音された音楽を聴くスタイルが多様化しても、多くの聴衆と同じ時間を共有し、アーティストの生の演奏に耳を傾ける音楽ホールのライブ感はやはり格別！繊細な楽器の音色を美しく響かせ、また、ダイナミックなオーケストラの演奏を大きな感動として届けてくれる"非日常"の空間――音楽ホールの魅力を探る。

～感性を磨く、感動を見つける～

Enjoy!+α

Arts & Entertainment

ほんの少しの好奇心と最初の一歩を踏み出す勇気――
扉の向こうにあなたの知らない素敵な世界が広がります

世界三大ホールのひとつ、ウィーン楽友協会大ホール（ムジークフェライングローサーザール）。"黄金のホール"と呼ばれている。

club keibun 2
2016 FEBRUARY vol.401

CONTENTS

Enjoy!+α Arts & Entertainment
感動を創造する空間！音楽ホールのすべて 01

音楽ホールを徹底解剖！"音響"の秘密を探る

Interview
響敏也さんに聞く
感動と歓喜をあなたにも！
ようこそ！！世界の音楽ホールへ

個性的な音楽空間を愉しむ

KEIBUN友の会会員特典のご案内
イベント／シネマ／アート／スポーツ／ゴルフ／旅行／レジャー／健康／カルチャー／グルメ 07

プレゼント／Reader's Letters 25

今月の表紙

あなたはわかりますか？

謎解き×世界遺産

グエル公園のベンチから
バルセロナの街を一望！？

アントニ・ガウディの作品群（スペイン・1984年登録）

グエル公園

まるでおとぎの国にいるようなカラフルなモザイクタイルのデコレーション！ここはバルセロナの街が一望できるグエル公園。自然と芸術に囲まれて暮らせる住宅地として建築家アントニ・ガウディが設計したが、あまりにも斬新すぎてまったく売れなかったとか。今ではサグラダ・ファミリア、カサ・ミラなどと並ぶガウディを代表する超人気の観光スポットに！

佐渡裕氏の音楽監督就任記念演奏会が行われたウィーン楽友協会大ホール。
今年5月にびわ湖ホールでの凱旋公演が控えている(詳細は9ページ参照)。©Werner Kmetitsch

音楽ホールを徹底解剖！〝音響〟の秘密を探る

ホールはひとつの楽器だ！ムジークフェラインの場合

2015年秋、指揮者・佐渡裕氏が音楽監督に就任したオーストリアのトーンキュンストラー管弦楽団は、ウィーン楽友協会大ホール(ドイツ語でムジークフェライングローサーザール、1870年完成)を活動拠点のひとつにしている。年末年始の恒例となったウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のニューイヤーコンサートの会場としてもおなじみ。音楽の殿堂ともいわれる聖地である。

絢爛豪華な装飾と金箔のまばゆさから〝黄金のホール〟と称され、すぐれた音響特性を持つホールとしても有名である。20世紀になって、建築音響学の権威レオ・L・ベラネクが世界中の音楽ホールを試聴・科学的に計測・分析し、[※1]著書の中でムジークフェラインに最高評価を与えた。その構造は、いわゆる〝シューボックス型〟と呼ばれる直方体の箱型。壁は漆喰(しっくい)で、舞台、床、客席の椅子など内部はすべて木を使用、また、床下の空間や吊り天井による屋根裏の存在がヴァイオリンの共鳴胴のような役割を果たし、ひとつの楽器のような品のある豊かな音響を生み出しているという。

ムジークフェラインとともに、ベラネクが世界三大ホールと称えたオランダ・アムステルダムのコンセルトヘボウ(1888年完成)、アメリカ・ボストンのシンフォニーホール(1900年完成)は、すべてこのシューボックス型だ。ベラネクの著書が発表されて以降、日本で建築された音楽ホールの多くは、このムジークフェラインの影響を大きく受けている。

シューボックス型からヴィンヤード型へ

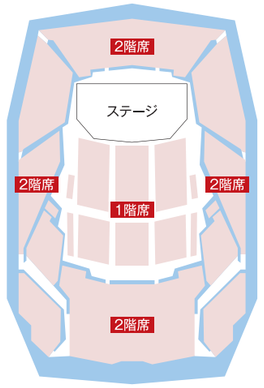
シューボックス型の構造の大きな特徴として、ステージから届く直接音に加え、横幅が狭いため側壁から遅れて届く反射音(初期反射音という)が豊富。また、天井からの残響音も均等に客席に届く。どの席に座っても音響的にムラが少ないのだ。ただし、客席規模的には限界もあるといわれ、むやみに空間を広げても音響性能の低下につながる。

しかし、時代とともに収容力の大きいホールも求められるようになり、20世紀後半に登場したのがアリーナ型と呼ばれる音楽ホールだ。ステージを取り囲むように客席が配置され、どの席からも舞台が見やすく、客席とステージの一体感がある空間になっている。音響設計としては、客席をいくつかのブロックに分け、それに段差をつけることで客席内に壁面をつくり、初期反射音を得ることを可能にした。この客席の段差がブドウ畑に似ていることからヴィンヤード(ワインヤード)型とも呼ばれている。

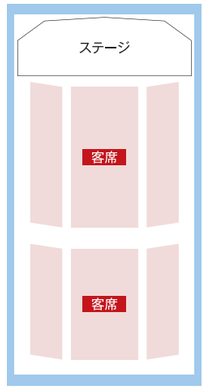
その先駆けとなったのがドイツのベルリン・フィルハーモニー(1963年完成)で、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者だったカラヤンのアドバイスで誕生したといわれている。

※1「音楽と音響と建築」(1962年出版、日本では1972年に出版)。建築音響設計のバイブルといわれている。

感動を創造する空間！音楽ホールのすべて



▲ヴィンヤード(ワインヤード)型のホール。臨場感のある空間になっている。



▲シューボックス型のホール。どの席でもバランスのよい音響が得られる。

音響のプロたちによる理想の〈残響時間〉

音が鳴り止んだ瞬間から、室内の壁などの反射による残響音が聞こえなくなるまでの長さを残響時間という。一般的に良い音楽ホールの条件は、この時間が2秒とされている。満席の客席において聴衆が最も心地よいと感じる数値だ。

大阪のザ・シンフォニーホール(1982年完成)は、この〈残響時間2秒〉にこだわって設計された日本初のクラシックコンサート専用ホールで、前述のカラヤンも「世界一の響き」と称えたという。また、滋賀県のびわ湖ホール(1998年完成)は、2000年に「音響家が選ぶ優良ホール100選」[※2]に選ばれている。大ホールは四面舞台をもつ本格的なオペラ劇場で、海外のカンパニーの公演や自主公演の実績も十分。音響には定評がある。

オペラの場合、歌手の声の明瞭さが求められる。オーケストラはステージより低いオーケストラピットで演奏するのが一般的だ。残響時間が長すぎると歌手の歌詞が明瞭に聞き取れないことがあり、残響は比較的短めに抑えられる。びわ湖ホールの場合は、オペラ仕様では残響時間1・5秒となっている。

コンサートの時にはステージに設置されたシェル(走行式音響反射板)を使って残響2秒前後に調整される仕掛けだ。小編成の場合は楽器の位置を変えたりして音響を調整する。

舞台裏では音響にこだわるスゴ技のプロたちが、アーティストとともにお客さまに感動を伝える一翼を担っている。

びわ湖ホール大ホールでは本格的なオペラが上演されている。平成28年3月5日(土)・6日(日)にはびわ湖ホールプロデュースオペラ「さまよえるオランダ人」(ワーグナー作曲・全3幕)を予定(詳細は11ページ参照)。

自分好みの席を見つけてホールならでは感動を！

KEIBUN友の会のネット会員「ねっとも」では、チケット購入の際、一部の公演で座席指定ができる。そんな時、最良の音を聴くベストポジションはどこなのか、迷ってしまう人も多いのでは？

オーケストラコンサートの場合は、ホール中央部か2階席中央前列が、ステージから届く直接音と壁や天井から伝わる反響音が絶妙にブレンドされてバランスがよいとされる。室内楽やリサイタルなど演奏者の直接音が聴きたい人は、前寄りの席がおすすめ。オーケストラでもひとつひとつの楽器の音色が聴き分けられる。ステージを取り囲むヴィンヤード(アリーナ)型のホールの場合、指揮者の演奏中の真剣な顔が見える舞台奥側の席も人気だ。指揮者とオーケストラの絶妙のコミュニケーションや演奏者の躍動する姿が間近に見られる。

また、2016年1月には京都市での本格的なオペラ上演を目指したロームシアター京都が誕生。旧京都会館の時代に課題だった設備面も大幅に改善された。さまざまな音楽ホールに実際に足を運んで、音の違いを楽しむのも醍醐味のひとつだろう。

撮影:小川重雄

リニューアルオープンしたロームシアター京都(旧京都会館)メインホール。京都の新たな文化芸術の拠点になっている(公演情報は14ページ参照)。

※2 一般社団法人日本音響家協会が2000年に設けた制度。2013年から一般社団法人日本劇場技術者連盟と共同で実施、名称を「優良ホール100選」に変更した。

感動と歓喜をあなたにも！ ようこそ!! 世界の音楽ホールへ

Interview

KEIBUN文化講座「音楽の招待席」講師 響 敏也さんに聞く

びわ湖ホール・大ホールホワイエにて

〝世界三大ホール〟だけじゃない！世界にはあまり知られていない素敵な音楽ホールが多く存在します。クラシック音楽を愛する音楽評論家・響敏也さんに、世界を旅して体験した音楽ホールの魅力やエピソードを語っていただきました。

ホールが演奏者を選ぶ そして演奏者を育てる

——これまで国内外の演奏会に足を運んでこられた響先生にとって、特に印象に残っているホールはどこですか？

名ホールといわれているところはだいたい行きましたが、世界で一番いい音がするのは、スロヴァキアの首都ブラチスラヴァにあるスロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団の定期演奏会場だと思います。10年ほど前に初めて行った時、シャンデリアがあって華やかな面影はあるのですが、音響のことを考えて内装を触っていないのでしょうか、あまり手入れされていなくて。ところが、いざオーケストラがそこで音を出してみるとすばらしい！ 残響が適度にありつつ、非常にクリアで鮮明な音が聴こえてくるホールです。

指揮者の岩城宏之さんもあそこはすばらしいとおっしゃっていましたし、朝比奈隆先生は実際にあのホールでよく演奏なさっていました。映画『のだめカンタービレ 最終楽章』のロケにも使われたそうです。でも、案外知られていませんね。ブラチスラヴァはウィーンからとても近いですし、ボヘミアンカットのグラスなどの買い物がてらにでも足を伸ばした方が絶対にいいですよ！

——ホールの音響は、演奏者にどのような影響を与えるのですか？

会場が演奏者を育てる場合もあるし、潰してしまう場合もある。例えば、シカゴ交響楽団は技術的には世界トップクラスのオーケストラといわれている名人集団で、世界で一番大きな音を出します。なぜそうなったのか。シカゴ交響楽団本拠地のオーケストラ・ホールには残響がほとんどないからです。そこで自分たちで音を大きく響かせる必要に迫られ、パワフルな演奏ができるようになった。残響がないから、音がずれているのもはっきりわかる。それで世界一の精密なアンサンブルになったのです。ものすごく厳しい条件のホールが演奏者を育てたというわけです。

スロヴァキアの首都ブラチスラヴァの街角
（写真左の建物がスロヴァキア・フィルの音楽ホール）

ウィーンのムジークフェライン（楽友協会）もいいのですが、残響が強いので鳴らしきるのは難しい。ウィーンフィルはそれを知った上で上手に鳴らしているんです。プロ専用に作ってあるレーシングカーみたいなもので、素人が運転したら危ない（笑）。

——オーケストラにとって本拠地となる会場を持つことは非常に重要なことなのですね。日本ではどうですか？

オーケストラが本拠地のホールで練習やリハーサルができて、本番の演奏をするのが理想的です。オーケストラ・アンサンブル金沢や新日本フィル、東京交響楽団をはじめ、日本でも徐々にそういうシステムをとるようになってきています。

——では、日本でおすすめのホールはどこですか？

いいホールはほとんど関西にあります。例えば、新装になった大阪のフェスティバルホールはコンサートからオペラまでできる会場で一番すばらしい！ 同じく2千人規模の客席がある大津のびわ湖ホールと西宮の兵庫県立芸術文化センターも、オペラの公演がきちんとできる機能を備えたホールとして非常に優秀です。純コンサートホールでは大阪のザ・シンフォニーホールが日本どころか世界で指折りといえます。一般的に指揮台は一番音が悪いといわれていますが、このホールはどこでもムラがなくいい音が聴けて、ステージの上でもいい音がするので指揮者や演奏者の評価も高い。客席数が少ないホールでは、いずみホール、ザ・フェニックスホールもいいですね。

音響だけでなく 歴史、文化も楽しもう

——音響の他に、海外のホールにはどのような魅力がありますか？

伝統や歴史のあるホールだと、そうした背景も含めて楽しめると思います。例えば、ウィーンのムジークフェラインは非常に凝った金箔を施した豪華な黄金の広間で、大作曲家ブラームスが活動していたところです。それと、ハイドンが30年間働いていたハイドンザールですね。同じオーストリアのアイゼンシュタットという町の丘の上にあるエステルハージ侯爵（こうしゃく）の城館の中にあります。ハイドンが働いていた当時の雰囲気そのままが味わえるところです。今も演奏会場として使われていて、私が聴いたコンサートは、プログラム前半がモーツァルトでした。侯爵が住んでいた当時のままのホールで美術品に囲まれてモーツァルトが鳴り出すと、実に良く合うんですよ。感激しました。ところが、休憩を挟んで後半のベートーヴェンが始まった途端、乱暴者が乱入してきたような…まるで天変地異みたいな感じがして（笑）。ベートーヴェンの音に当時の人たちがどれくらい驚いたか、はじめて感覚的にわかった気がしました。

近代的なホールで聴くとベートーヴェンもモーツァルトも同じように響きますが、ハイドンザールのように実際に貴族がいた空間で聴くと、ベートーヴェンがいかに時代を画した音楽であるかがはっきり感じられるんです。今はデジタルやインターネットで簡単に音楽が聴ける時代です。そんな中で、なぜクラシック音楽を聴くためにわざわざ音楽ホールまで足を運ぶのか、ハイドンザールで演奏を聴いたことでその理由が明確になりました。

——最後に、クラシックコンサートに行くことに高いハードルを感じている人へメッセージをお願いします。

クラシック音楽は日本では明治時代に教養主義と一緒に入ってきたから、難しいものと考えられてしまった。でも、数学の問題ではないのだからわからなくてもいい。感じて楽しむことができればそれでいいんですよ。

作家・音楽評論家　響 敏也（ひびき・としや）

スタジオ・トランペット奏者として活動後、放送作家に。現在は作家・音楽評論家。新聞雑誌に評論、放送や舞台に台本を執筆。「オペらくご」創案と脚本は『背広屋の利発な結婚』『あしたの瞳』『ブラック・ジャック』など。作詞では新日本語詩による『第9』、大リーグ松井秀喜公式応援歌『栄光の道』、合唱組曲『きのう・きょう・あした』など。著書『親父の背中にアンコールを 朝比奈隆の素顔の風景』など。KEIBUN文化講座の講師も務める。

受講生募集中

第37期【春期】KEIBUN文化講座
『音楽の招待席』
～天才たちの奇蹟にせまる120分！
講師／響 敏也（作家・音楽評論家）

人類の歴史に残る大演奏家たちの奇蹟の名演を集めて、音の芸術が記録されてきた歴史を19世紀から現代までたどります。

開講日時（全6回）／各13:30～15:30
4月7日（木）・4月21日（木）・5月19日（木）
6月2日（木）・6月8日（水）・6月30日（木）

☆6/8は特別コンサート体験ー現地学習ー
ザ・シンフォニーホール（井上道義指揮・大阪フィル）を予定。
現地学習には別途参加費が必要です。

個性的な音楽空間を愉しむ

滋賀県内には音響特性に優れた個性的な音楽ホールがたくさんあります。
プロだけでなく、地域の音楽家にも活動の場を提供する身近なホールを紹介しましょう。

楽器のもつ自然な響きを楽しむためのホール

フィガロホール

●大津市中庄1丁目16-14　TEL:077-522-3106
●京阪「中ノ庄」駅徒歩2分

フルート奏者の多田ユウ子さんが、1998年に開設した客席100席規模のホール。内部は木調のしっとりとした雰囲気で、ステージの框（かまち）にはヴァイオリンに使用されるカーリーメイプル材を使用し、楽器のもつ自然で繊細な響きを再現。室内楽に最適で、クラシックの他にジャズ、ボサノバなど、さまざまなジャンルが楽しめる。ホワイエではドリンクサービスも。

全国有数の音響空間でさまざまなイベントに対応

ガリバーホール

●高島市勝野670　TEL:0740-36-0219
●JR「近江高島」駅徒歩15分

高島市のアイリッシュパークにある498席の中ホール。三角屋根の最上部にはアイルランドから寄贈された釣鐘があり、ホールのシンボルとなっている。音響特性は全国でも有数で、用途に応じバルコニー席のカーテンの開閉で残響時間を調整している。ここでは毎年5月「びわ湖国際フルートコンクール」が開催され、また、関西フィルリラックスコンサートも10月に開催予定。

最新の音響設備で観客との一体感を生む

ルッチプラザ・ベルホール310

●米原市長岡1050-1　TEL:0749-55-4550
●JR「近江長岡」駅徒歩10分

310名収容の規模ながら最新の音響設備を持つシューボックス型の本格的なコンサートホール。楕円形のホールを満たす豊かな響きが観客との一体感を生んでいる。スタインウェイ社製のピアノも備え、本物の響きが味わえるのもうれしい。2階のカフェレストランから眺める伊吹山がすばらしく、英国式のガーデンデッキは季節の移り変わりを感じさせてくれる。

バロックデザインのホールに荘厳なパイプオルガンが響く

安土文芸セミナリヨ

●近江八幡市安土町桑実寺777　TEL:0748-46-6507
●JR「安土」駅徒歩25分

市民の文化交流の場としてコンサートだけでなく多目的に使用される座席数380席の中ホール。織田信長が権威をふるった時代、安土に開校した神学校でオルガンが演奏された史実に基づき、舞台正面にイギリス・マンダー社のパイプオルガンを設置、専任のオルガニストもいる。その音響は県内屈指を誇り、視覚的にも贅沢な気分が味わえる空間である。